

角川短歌賞受賞作を読む 田中拓也

第六十二回角川短歌賞に佐佐木定綱「魚は机を濡らす」と竹中優子「輪をつくる」の二作品が選ばれた。

- ・ 男性の吐瀉物眺める屋下がり力ニチャールンかおれも食いたい
- ・ 学校に来るだけでいいひとになり職員室に裸足で入る

佐佐木定綱
竹中優子

「選考座談会」でも話題になった二首を抄出した。新人賞が二人授賞になる時は対照的な作品である場合が多いが、今回も典型的なパターンであったといえよう。「選考座談会」での選考委員の発言を見ても、それぞれの主張と短歌観がぶつかり合っており、これからの短歌史の行方を考えるうえでも読み応えがあった。

- ・ 「死ねばいい」女ら笑う隣にて嘔るつけ麺の味をこそ思え
- ・ 愛憎の汁なし担々麺啜るテロのニュースの聞こえる部屋で
- ・ 君の排泄物とぼくの吐瀉物を引き合わせるよ下水処理場

佐佐木作品は都市生活を送る男性の「痛み」をひりひりと感じさせる連作であった。連作の中で最も注目したのは「食」と「排泄物」を詠んだ作品である。「食」と「排泄」はどれだけ科学技術が進んでも、人間の「生」の根源にかかわる機能であり、生きるうえで手放すことのできないものである。佐佐木は詩の言葉としてぎりぎりの地点において、一人の「男性」の「生」をありあ

りと描き出している。

- ・ 手をつなぐ冬の廊下は火のようにひかる海岸線と交わる
- ・ 木星のように恋しい 教室にあわいつむじがはるる並ぶ
- ・ 緑色の野線しずかにひかる朝 友は敵でも味方でもない

竹中作品は高校生活を送る「女子」の「生き難さ」を丁寧に描いた連作であった。「冬の廊下」の向こうに見える「海岸線」、同級生の髪髪の一つ一つの世界を希求する作品である。また、三首目に見えるもう一つの世界を希求する作品である。また、三首目に掲出した「友は敵でも味方ない」は作者なりの「青春」の到達地点であったのかもしれない。

二人の作品を読みつつ、私は驚田清一『しんがりの思想』（角川新書）の一節を思い出していた。

わたしたちには、生きるうえでどうしても削除できないとなみが少なからずある。出産、つまり種の再生産がそうだし、日々の食（食材の調達と調理）と排泄（糞便の処理）、つまり個の再生産がそうだ。生まれた子どもを養育し、教育すること、これも省きようのないことだ。

驚田は同書の中で、日本においてそれらの「いとなみ」が近代化が進む中で変容し、「いのちの世話」を自力でおこなう能力が喪失していったことを指摘している。今回の佐佐木の受賞作「魚は机を濡らす」は、今という時代に抗うように、生の「いとなみ」を生々しくうたいあげている。また、竹中の「輪をつくる」も学校という国家の教育の「枠」の中におさまりきらない「個」の心の叫びを詠んでいる。人間として「生」の根源に関わる部分を短歌を通して表現した佐佐木と竹中のこれからの作品も注視したい。